

花芽観察会報告

上北沢桜並木で2009年2月1日(日)花芽観察会とセミナーが行われました。今回の観察会には、寒さにもめげず30名近くの方々が集まり、熱気も感じられました。

さて、観察会の結果ですが、桜診断一覧表をご覧ください。桜再生と言う観点から見ると、この数年の活動で再生の方向に向かっているものの部分的には桜並木は弱っています。

その大きな原因は、①老化

②ナラタケモドキ

③害虫

④車の排気ガス

⑤車の桜木への衝突

⑥樹間距離が狭い

と考えられます。①老化に対しては、80年以上経過した桜木が住宅地の中で生き延びていく事自体大変なことです。桜並木の南西奥に80年の古木が残っています。これは、石井樹木医がセミナーで言われているように、周りの環境(近年、松沢病院の樹木や一般住宅の庭先のみどりが減少している)によって桜並木が守られていたという事が言えます。それは、桜並木に来る鳥や昆虫が近年少なくなっている事で、毛虫など害虫が、増えている事に現れています。一方、ソメイヨシノは園芸種なので、人間の手間をかければかけるだけ応えてくれます。例えば、胴巻きによって生まれた不定根によって、桜木は、幹の途中から根を出し、これが、幹の内側に伸びたり地表に届く事によって、やがて大きな幹となって、世代が交代していきます。ことがこの桜並木では数多くの桜木で実証されています。また、弱った枝の枝きりや胴吹き、ひこばえの伐採によって、新たな強い枝がでます。桜並木では、桜木が生きることを人間が長い時間をかけて、お手伝いしてきました。しかし、②ナラタケモドキやベッコウダケの被害は、人間にも食い止める手立てはない。ベッコウダケは、進行が遅く、伝染力も遅いが、ナラタケモドキは、地中から、桜の根を侵す「根株腐朽菌」を持つ。これに汚染された土壌は入れ替えるしかない。樹木番号の5番は現在枯死。植え替えを待っている。樹木番号40、41、42は既に、同じ戸籍で枯死した経歴を持つ。若木でも数年立つと根株にナラタケ菌が蔓延する。今後更に隣へと伝播していく可能性が大きい。

③コスカシバやモンクロシャチホコなど害虫に関しては、何故発生するかは、分からない点が多いが、気候変動や前述の周りの鳥が住むみどりの環境にも多く影響すると樹木医は言います。みどりは減る一方なので、当面、世田谷区にお願いして、薬剤散布で切り抜けます。しかし、薬剤は撒きすぎれば人体への影響や鳥への影響もあり散布の



方法やどれほど撒くかは、試行錯誤しながら行います。

④⑤車の桜木への影響は大きい。桜は、樹皮でも呼吸しているので、排気ガスなどに弱く木々を傷めているという事だけこの紙面ではお伝えいたします。⑥は木と木のあいだが狭いという問題です。80年前若木であった頃は、樹幹距離が5m以内で植えていました。現在幹も大きくなって、少なくとも10mの樹幹距離が必要です。たくさんの太陽と根の張るスペースが必要なのです。桜は、もともと街路樹には適していないと言われる理由の一つです。今後樹幹距離を守るには、枯れたらその場所の樹幹距離を考えて、代わりの桜木を植えていく事です。戸籍33と35に桜を植えないのはそのためでした。

桜並木の維持管理の特効薬はない。何ととっても桜並木を守るのは日常桜並木を通る人々の気持ちと汗に頼るしかない。桜は、元気なときには元気な姿を、弱ったときは多くのシグナルを発信するこのシグナルを読み取れなくなったとき桜並木はなくなります。